［地域総研所報　1巻1号，P61－68（2003）（翻訳）］

「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」　第3章*

E.バイロイター著　　山 城　　順 訳**

キーワード:
覚醒運動、児童救済、聖書協会、　幼稚園事業

要旨

すでに「ディアコニー研究」にとって基本テキストとなっているE. バイロイター著「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」の第3章の翻訳である。ヨーロッパを目覚めさせた敬虔主義の信仰覚醒運動は啓蒙主義との緊張関係の中でディアコニーの分野を様々に展開した。聖書協会の聖書頒布運動は、監獄に囚人を訪問し、監獄改善を要求し、さらに社会改善へと運動を展開した。また貧困だったスイスで時計や計量器などの精密機械産業を育成した。そして、幼児教育が全ヨーロッパに広がった。

目 次

内的覚醒運動の先駆者、児童救済活動
1. ディアコニーの母体としての信仰覚醒運動と19世紀における内国伝道、ドイツ・キリスト教協会、J. A. ウルルシュペルガー、シュタインコップとヨーロッパにおける聖書協会の創立
2. 聖書的現実主義、オーベリン、幼稚園の父、「キリスト教産業」、Ph. M. ハーン、G. A. ヴェルナー
3. 南ドイツの救護施設運動、ボイゲンにおける独房、貧民学校教師の施設、キリスト教教育
4. ヴァイマールのJ. D. ファルク、ラインラントにおけるグラーフ・アーダルベルト・フォン・デア・レッケ－フォルマルシュタイン
5. 結び、青年への奉仕、幼稚園事業、家事と教育事業、キリスト教教師の理想

訳者あとがき

* Received December 5, 2002
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　福祉コミュニティ学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

第3章

内的信仰覚醒運動の先駆者
児童救護活動

1
ディアコニーと19世紀における内国伝道の母体としての信仰覚醒運動、ドイツ・キリスト教協会、J.A. ウルルシュペルガー、シュタインコップとヨーロッパにおける聖書協会の創立

信仰覚醒運動は、ディアコニーと19世紀における内国伝道の、母体を形成した。その前史は18世紀の最後の3分の1に及ぶ。理性的なキリスト教を伴う啓蒙主義の満ち潮のただなかで、正統信仰の小島は、地方農民の中で、とりわけ北ドイツにおいて孤立し続けた。新しい出発にとって、大切なことは、主にヴュルテンベルグに、またニーダーランドに、残っていた無数の敬虔主義者の小さなグループがいたことである。この後期敬虔主義のグループは、18世紀の終わりにむかって、地方に広がる緊密な情報網を形成した。この「地方の静けさ」の下で、主に**ヨーハン・アルブレヒト・ベンゲルス**(1687-1752)によって深遠な聖書主義が語られた、聖書に親しむ質素なキリスト教が愛された。[1]

これらの聖書主義—敬虔主義のグループの多くが、アウグスブルグのルター教会の長老、**D. ヨハン・アウグスト・ウルルシュペルガー**(1728-1806) が1780年に創設し、バーゼルに居を構えた**ドイツ・キリスト教協会**に、集まっていた。ここで、これらの聖書信仰の力の結集がおこり、敬虔主義が進めていたすべては、驚くべき生き生きとしたものとなっていた。**アウグスト・ヘルマン・フランケ**がすでに育てていた、信仰に覚醒した仲間たちとの関係は、イギリスで容易につくられた。[2]

実際に、実践的キリスト教が、19世紀に初めての完全な開花を経験したのは、とりわけアレマン人の地域である。**バーゼル**においては、土着のスイス人の豊かさと、アレマン人の冷静な能力と、シュヴァーベン人のキリスト教教育の素質とが、集合して、神の国に奉仕する世界的な広がりをもつようになった。[3]

この信仰覚醒運動から、最初に聖書協会とトラクト頒布協会が生まれた。1804年、英国聖書協会と外国聖書協会がロンドンに創立された。同じ年にバスラー聖書協会が設立された。[3*] 英国聖書協会の外国人書記は、活動的なシュヴァーベン人、**カール・フリードリヒ・アドルフ・シュタインコップ**(1773-1859)であり、バスラーのキリスト教協会の元書記、その人であった。彼はこのロンドン聖書協会の人たちのために西ヨーロッパ全体を旅行して回り、いたる所に支部を作った。1812年にヴュルテンブルクの聖書協会がシュトッツガルトに、1814年にプロイセン中央聖書協会がベルリンに生まれた。**19世紀の20年、30年の間に全ドイツは聖書協会のネットに覆われた。**力を弱めた理性主義の「民族聖書」は 成功していたが、再び排除されようとした。この事業によって、ドイツのキリスト教にとっては、教会固有の領域を越えていく展望が広がった。

2
聖書的現実主義、オーベリン、幼稚園の父「キリスト教産業」
Ph.M. ハーン、G.A. ヴェルナー

東ドイツの地方には、一風変わった信仰の世界がある。「18世紀末に、世界はほとんど耐えられない力に満たされて、激烈に、突然あらわれるという終末待望」の信仰に覚醒したキリスト教徒たちが、あらわれた。[4] すべての出来事は、近づいているキリストの再臨を指し示す指標の役割を果たした。また再臨待望がまだかなえられていない時でも同じように、神の国が、見ることの出来ない世界から突然あらわれると、人の子のからだと魂と、そしてこの世の全財産を取り上げるという、衝撃的な期待にとどまっているのではない。この世は、まだ変っていないすべてが変えられるために、彼（キリスト）が再び来るまで、そのなかでキリストが働いている神の国の活動の場であり、**そこから新しいキリスト教の愛の意志が生まれる聖書の現実主義の中核を構成している。**この新しい、キリストとの分かちがたい連帯性を確信してうまれた現世指向性は、

実践的には、とりわけ—創設された救護施設による教育制度改革の中で、農業の中で、そして「キリスト教産業」の試みの中で—この三つの展開方向に向かって、働いた。[5]

ヨーハン・フリードリヒ・オーベリン牧師(1740-1826)はアルザスでシュタインタール(石の谷)を花咲く谷に変えて、先へ進んだ。彼は謙虚さと忍耐をもって、国の最も貧しく最も荒れた教会教区を、一生かけて真実なものとし、そしてここで幼稚園の父、組合活動の父となり、伝道者、そして不屈の福音宣教者となった。[6]

彼は**キリスト教産業**の思想を、その中で、またほかの工場で実現するために、後にル・グランで受け継いでいる綿紡績工場の導入を指導した。[7]

オーベリンは学校の校舎を建て、農民たちといっしょに街路と橋を整備し、農園を向上させ、貸付金庫を設立し、後の経済的、社会的発展を大胆に先取りして、才能に恵まれた教育者であることを証明した。そのとき、彼は来世の学問に駆られた。彼の最愛の妻が早く死んだ後、1年間は、ほとんど毎日夢を見ているか、目を覚ましているかのような、彼女との霊的な結婚生活を送った。彼女は彼だけにあらわれたのではなく、シュタインタールで多くの他の人たちにあらわれ、災い〔が起こらないよう〕に注意し、なにが起ころうとしているかを預言した。

オーベリンは異邦人宣教師の暖かい友であり、1795年以来、宣教師の聖書を学ぶ学生であった。彼はフランスの伝道的なカトリックのグループの中で、聖書頒布と福音伝道を大きな犠牲のもとで進めた。彼の誠実な**下女**(Magd) **ルイス・シェプラー**、民族出身の質素で信仰深いこの女性は、48年間、無報酬で、死ぬまで優れた女教師として、小学校で、共同体出身の誠実な仲間たちと一緒に、彼に仕えた。

1760年新年元旦に、20歳の**オーベリン**は、日記に次のように書いている。

「聖なる神！ 私は、私と私が持っているものすべてをあなたにささげます。私の魂の力、私のからだの肢体、私にできること、私の時間を。主よ、私を用いてください。あなたに奉仕するように定められた道具として！ 私が私の最後の死の瞬間にも、あなたに仕えているものとしてください。」[8]

「キリスト教産業」を設立する試みの中で、**とりわけフィリップ・マテウス・ハーン**(1739-1790)と**グスタフ・アルベルト・ヴェルナー**(1809-1887)は、2人ともスイス人牧師であり、われわれの前に突出している。フィリップ・マテウス・ハーンは、「機械をつくる才能」において、彼の同国人の中に眠っている科学技術の才能を呼び覚ましたスイス人の父祖たちのなかで、意義深い人である。同時に、彼は信仰の覚醒を求めるすぐれた説教者であり、文筆家であり、牧者である。愛の人は貧しいスイスの高原で、ヨーロッパの人たちが耳を傾けた、とぎれることのない発明品の連続によって、スイスの繁栄する機械の輸出産業を可能にした。彼はすばらしいプラネタリウムを製作し、科学技術のより完全な計量器の発明家であることを証明し、精密な計量器の考案者、日時計の専門家、砲兵の専門家、そして測地学の器械の専門家であることを証明した。

科学技術・手工業の援助者また協力者の人々と一緒に、彼はキリスト教企業家精神の協同組合という意味における作業場を経営した。[9]

キリスト教産業の思想は、南部の全域で、スイス人副牧師、**グスタフ・アルベルト・ヴェルナー**によって守備一貫して試みられた。彼は、技術的生産手段を抑制なく使おうと待ち受けている、魂を失った、社会を破壊する、悪魔が自分の工場にいないか探した。彼のロイトリングの機械工場、彼の金属鋳造、デッティンゲンの大きな製紙工場、家具工場、よく知られた徒弟の作業場を、彼は未婚の協力者たちの家族的な共同体の中で、福音伝道の精神をもって、共同生活をするように導いた。純益を、身寄りのない子どもたちと彼の愛する被保護者たちの収容と、病人たちと困窮者たちの援助に、融資した。

ヴェルナーもまた、情熱的な神の国待望で満たされていた。彼は、「ヨハネのキリスト教的愛」の出現と、教会と民族の生活の再生と、近いうちにキリストの王国のために人を獲得することを、期待した。この世は、彼にとって、再臨の時が来るまで働きかけてくださるキリストの活動の場である。彼の大胆な「キリスト教産業」を建設する試みは部分的には達

成した。ヴェルナーは自分が建てた病院で永眠した。[10]

偉大な子どもの友ヴェルナーは製紙工場をはじめるにあたり次のような詩を書いている。

「生活は、仕事にロールと元気なタービンを取りつけた活発な器械であり、大きな、また小さな車輪である！　貧しい人に彼の料理を、裸の人に着るものをつくりだす、私たちの仲間の中に愛と義が支配しますように」［11］

3
南ドイツの救護施設運動、ボイゲンにおける独房、貧民学校教師の施設、キリスト教教育

非行化する**子どもの救護施設**の創設は将来の全体に影響を与えた。貧民救済は、市民社会の本来の事案となった。宗教改革の最初の意図とは違って、ルター主義は教会を、すべての外面的な世界の事柄に対して、消極的態度に導いた。啓蒙主義はこの状態を変えようとはしなかった。非常な困窮の中で、公共の福祉が明らかに低下すると、貧窮は際限のないものとなった。そのとき助けることができたり、助けようとする人はまったく誰もいなかった。ナポレオン戦争の苦難の中で、覚醒した仲間から、**集会するキリスト教徒**から、青年男女が頭角をあらわしはじめた。彼らは、ここで外面的な困窮と道徳的な荒廃とが互いに結びあっているような、下の階層に始まった社会的困窮を、確かな展望を持って認識した。[12]

アレマン人の仲間で、**クリスティアン・フリードリヒ・シュピットラー**(1782-1867)と**クリスティアン・ハインリヒ・ツェラー**(1779-1860)は、非行化する子どものための最初の救護施設をたてる場所を一緒に探した。それは非行化した孤児の青少年たちを助け、ヨーロッパにおけるナポレオン戦争の恐ろしい遺産とその荒廃した後遺症を取り除くにふさわしいものであった。ここで、**ついに内国伝道の創設を導いた慈善事業の道が始まった。**

シュピットラーは大企業家になる素質を持っていた。彼は限りない粘り強さをもってバーゼルから、バスラーミッションの創設(1815)、フォンSt. クリスコナ(1840)、リーエンにおけるディアコニー施設(1852)、ほかの事業を導く、神の国の計画を遂行した。

キリスト教事業の偉大な創設者とその組織家は、ツェラーが救護施設をつくることができる比類のない人であることを認めた。法律家であり、早い時期に教師としての真の召命を見出したツェラーはシュピットラーと共に、1820年のこの計画を、もっとも荒廃した、以前はドイツ騎士団のもので、結局伝染病の野戦病院に使われていたバーデンにあるシュロス・ツー・ボイゲンの中でなしとげた。二人とも信徒である彼とシュピットラーは、そこで貧しい子どもを助け、「貧民学校教師」を養成する施設の創設を可能とする会を、バーゼルにつくった。[13]

ツェラーは当時別のところでもはじめられ、広まっていた救護施設を、キリスト教教育へと育てた偉大な先駆者アウグスト・ヘルマン・フランケがしたように、ペスタロッツィの経験と知恵とを教育に結びつけた。ヴィヘルンはツェラーから決定的に学んだ。ここで、この基礎の上に、**19世紀に大変長い間自由主義の教師とならんで、もっている力を発揮させたキリスト教学校教師のタイプが、この基礎と教育施設の実践的な活動の中で養成された。**[14]

ツェラーはこの仕事を、1820年に10人の貧民学校教師候補者と、20人の少年と10人の少女と一緒にはじめ、40年間、続けた。まったく自由な寄付によって生計を立て、寄付のために物乞いはしなかった。彼は子どもの多い家族と、施設に住む生徒たちを、友人の自由な寄付によって恵ませた。すべての施設は、全能の神が望んでいる限りのことであって、長く存在するべきではないし、可能であってもならない。ツェラーは75人の子どもを同時にみるようなことは制限するつもりであった。**家族原理は彼によって救護施設の根本原理とされた。**彼は施設〔の規模〕を小さく保つことによって、閉鎖的な教育社会の特徴と家庭生活のそれを調和的に結びつけようとした。敬神の念と実践的な才能は、彼においては表裏一体である。

子ども達は、おもに家と畑で忙しく働いた。産業は、子どもと身をもちくずしたその両親の不幸に、責任があった。人は、農業労働者と手工業者を子どもの中から探させ、家内産業の中で日々必要なものをできるだけ多く家で

まかなって生産した。だが、施設はそれによって存続していたのではない。そうではなく後援者たちの寄付金によっていた。人々は、ずっとあとになって、やっと養育を任せられた少年少女たちを、工業界に送り出す準備をする勇気をもつようになった。この少年少女たちは、やがていっそう工業界に入っていき、そこで、日々のパンを求めることになるのであった。ツェラーともう一人の才能に恵まれた教育者によって非行少年と接する偉大な知恵が得られ、それはさらに伝えられた。ツェラーは言った。「おのおの方、改善すべきである。おだやかで、忍耐強く、そして愛情こめて接する勇気をしっかりもちなさい」。ツェラーは、とりわけ施設の生活の退屈を施設の大きな祭りによって元気づけることを考えていた。彼はここでは親方であって、近くのすべての人々にとって祭りを嬉しい日にし、真の祭りとし、そこには人々が四方八方から集まってきた。南ドイツの慈善事業が広く住民たちの中に根を張り、ここで基礎を得た。

宣教の祝祭と、施設の祝祭とは、あらゆる階層の中で民の中心であり、また霊的生活の中心であった。かなり多くの子ども達は救護施設から古い堕落した状況に逆戻りし、突然なんらかの警察報告に浮上した。それは果てしなく多く届けられた。

3月革命以前（1848年以前）の時代の南ドイツの救護施設運動はボイゲンからはじまった。世紀の中ごろに至るまで、ヴュルテンベルグにおいてだけも20以上の救護施設がうまれた。それはシュヴァーベンのやり方にふさわしく、小規模になされた。大きな行動は苦境を完全になくすためには、向いていなかった。ヴィヘルンが称賛した南ドイツの敬虔主義が受け継いだ価値あるもの、即ち、個々の子どもとの人格的牧会的会話—その愛に満ちた人格的な扱いは、ここでのみ発揮できたのである。

両親の意思に反対して子どもを収容することを、ツェラーは不愉快に思った。人格的な関係に基づく慈善事業は意外な成功をおさめた。ボイゲンはツェラーの家族と同じような三つの家族から、それ以外からもしばしば導かれた。[15]

ボイゲンはまた**貧民学校教師－ゼミナール**とも手を組んだ。教師養成施設はほとんどなく、教師の養成は長い間無秩序のままだった。ボイゲンにおいて、必要な時には、教師として無給でこの職に誠実にとどまることができ、宣教の責任感をもって仕事に従事する職人が養成された。ここでその最初の提案を受けたゼミナールと他の兄弟の家から、**ディアコニー施設**が生まれた。その養成所の所在地には、救護施設の家長・宿泊所・都市伝道者・巡回伝道者、療養所の看護人、青少年担当書記官たちがやって来た。この兄弟団と同じく廃屋〔ラウエン・ハウス Rauen Hauses〕の発祥の地に、ツェラーの名づけ親は影響を与えた。

ボイゲンの貧民学校施設の使命について、ツェラーは1820年、つぎのように語っている。

「それは強制された施設ではないし、そうならない。そうではなく、イエス・キリストへの愛の自由な欲求から出たもので、自由意志をもち、自由な愛から行う、自由な貢献をたのしみ、自由な人が導き、自由意志をもつ人から構成し、貧しい青少年による奉仕を自ら決断してささげ、そして洗礼を受けた主に、その両親から自由に献げられる・・・・子どもを収容した。

施設は、彼らの手の働きでパンを得、世の名声でなく、世の宝でもないものを求め、貧しい人、少数者、卑しい人に対して愛に満ちて腰を低くする、節度ある謙虚な人を養成しようとした。」[16]

4
ヴァイマールのJ.D.ファルク
ラインラントのグラーフ・アーダルベルト・フォン・デア・レッケ

ツェラーは、もう一人の偉大な内国伝道の先駆者、ワイマール公爵の公使館参事官である**ヨハネス・ダーニエル・ファルク**（1768-1826）が考えたことを、ボイゲンでした。1806年のイエナ戦争の後、また独立戦争の年に、彼は底知れぬほど深い子どもの悲惨を見た。荒れ放題の時代に、未婚の出産数が上昇し、父親たちが軍服を着、母親たちは幼児をその運命に任せた。通過した軍隊の群れは、伝染病をあとに残した。共同体は助けるためにはあまりにも貧しく、子ども達は戦場のまわりをさまよい歩くか、または街を不安なものにした。警

察はこれらの若い放浪者、物乞い、そして泥棒を捕らえてとにかく獄に入れた。

ファルクはワイマールで「**困窮者友の会**」を設立した。彼はこの不安に満ちた時代に、4人の彼の子どもを伝染病で失った自分自身の悲しみを通して、深い同情をもって、故郷を失った子どもたちを彼の家に集めた。彼は、彼らを調査し、勝手気ままな習慣をいったん規律あるものとしたあと、彼らを村の周辺で家庭教育をしている職人または農民の家庭に預けた。彼はやがて200人のこれらの不幸な子どもを就職させた。彼は彼ら全員から目を離さず、日曜ごとに自分の周りに集めた。

まず、1823年、彼は本来の施設教育に移行した。彼は、ペスタロッツイと同じ意味で、購入したルターの館の拡充をし、寮の生徒たちの自発性を励ました。ここでは、多くの歌が、子どもの真の明るさを満たしていた。私たちは「おお、汝、喜びの、おお汝、祝福のクリスマスの時」というファルクの歌を歌っている。ヴィヘルンはクリスマスの祝祭の細部に到るまでファルクに学んだ。[17]

彼の生涯と慈善事業は、それを学ばせたダンツィヒの市参事会員の警告を果たすものであった。

「ヨハンネス、あなたはそこから出て行く。神とともに行け。あなたは私たちの借り手である。だから、あなたは私たちに受け入れられた者であり、また貧しい子どもとして、あなたに愛に満ちた世話をする。あなたはこの借りを支払わねばならない。神はあなたをどこに導くというのか、また、あなたの生涯の将来の定めは何であるのか。あなたは貧しい少年であったことを忘れてはならない。いつか貧しい子どもがあなたの戸を叩くとき、そう思え。私たちは、死んだ者であり、ダンツィヒの白髪の年をとった市長と市参事会員であり、ノックをする者である。そして、あなたたちを戸から追い出したりはしない。」

グラーフ・アーダルベルト・フォン・デア・レッケ－フォルマルシュタイン(1791-1878)は、なお偉大なドイツの救護施設の創立者である。彼はラインラントでヨハネス・ファルクの影響を受けて、1819年、「孤児と非行少年の救護と教育協会」を設立した。彼は、はじめオーベルディクでは、彼の父親の家のような、最後には広大な建物の集まりと大きな家畜小屋と仕事場をもつデュッセルタールの古い修道院の中に、ラインラントにおいても全域的に災害となっていた、迷い歩く孤児と兵士になった子どもを、深い愛情をもって迎えた。彼は、まったく、自分一人の責任で必要なお金を集める、根気強い募金家であった。

ヴィヘルンは一生の間、彼に懐疑的な態度で接していた。ヴィヘルンはメソジストの回心への渇望と、子どもたちを道徳的な評価によっていくつかの階級とグループに区分することを認めなかった。情熱的な伯爵自身が1847年ラインラントにおけるこの事業から離れ、独立したことはよかった。彼はシュレジエンに移住した。そこで休むことなく働いた慈善家は、**クラシュニッツ**に、精神病患者のための施設を、男奉仕者と女奉仕者〔ディアコーンとディアコニッセン〕を養成する施設と結びつけた「**ドイツ・サマリア修道会修道院**」を創設した。彼は、ラインラントで働いた時、ディアコーンとディアコニッセンの復活と、アルコール中毒患者の療養施設の創設等々の内国伝道の多くの課題を予測した。彼がこれらの課題を実際に実現するためにとった手段はいうまでもなく実行できるものではなかった。だが彼の功績は広く認められている。

5
結　び
青年への奉仕、幼稚園事業、家事と教育事業
キリスト教教育の理想

ヴィヘルン以前の人たちがなした信仰覚醒運動の慈善事業が達成したところを振り返ってみると、それは**青少年に奉仕**をするという観点からなされていた。**青少年**への集中はアウグスト・ヘルマン・フランケ(1633-1727)に由来する。ハレはキリスト教学校制度の中心となり、新しいキリスト教教育を展開した。ヨーハン・フリードリヒ・オーベリン(1740-1826)は非行少年たちを彼のアルザスの共同体に集め、**幼児事業**をはじめた。フリードリヒ・フレーベル(1782-1852)は彼の予備知識と研究によって、子どもの早期教育を成熟したものへと導いた。内国伝道の幼稚園事業は全世界に手本となった。[19]「最年少者共同体の募

金」のために、後の**幼稚園の女教師のセミナー**が生まれた。

ここから、幼児事業のはじめに明らかになったことは、救護館運動がチュリンゲンやラインラントでますます拡大したように、南ドイツの地域で全盛期となったことである。内国伝道の多くの大規模施設は、これらの奉仕をするのに非行少年を投入した。**国民の困窮のすべては青少年にまず具体的におこった。古い救護館運動から大きな施設と教育事業が成長した。**貧民学校教師の養成の中に、救護施設の中で始めた教育学が生まれた。それは、19世紀におけるキリスト教教師の理想のタイプを目指すアウグスト・ヘルマン・フランケに—ペスタロッツイに助力を求めたように—求めた。教育のために養成された信徒の助手・「兄弟たち」は、後期ディアコニーの準備段階であった。ヴィヘルン以前は、まったく南ドイツの先駆者たちが「キリスト教産業」の社会福祉の課題を認識していただけで、大きな成果はみられなかった。

注　本の題名を「　　」に訳し原文を(　)で記した

1, E.Beyreuther,「信仰覚醒運動」、「その歴史における教会」の中 (Die Erweckungs bewegung, in: ,,Die Kirche in ihrer Geschichte"). Ein Handbuch, herausgegeben von Kurt Dietrich Schmidt und Ernst Wolf, Göttingen, (1963), 1977 2

2, Erich Schick,「前兆と先駆者」ラスラーミッションの始まりに至るまでの福音主義教会の宣教史の基礎 (Vorboten und Bahnbrecher, Grundzüge der evangelischen Missionsgeschichte bis zu den Anfängen der Rasler Mission), Basel 1943, 83 頁以下

3, Franz Schnabel,「19 世紀のドイツの歴史」(Deutsche Geschichte im 19. Jahrhundert), IV. Band: Die religiösen Krafte, Freiburg 1955 (abgekürzt: Schnabel), 400 頁以下

3*,M. Simon,「バイエルンの福音主義教会史」参照(Ev. Kirchengeschichte Bayerns), 1952 II, S. 536 *ff*.- E. Schick,「前兆と先駆者」(Vorboten und Rahnbrecher), 1943- 聖書協会の歴史文献. vgl. RGG III, 1. Rd., Sp. 1157 頁以下.

4 Alfons Rosenberg,「キリストと地上」(Der Christ und die Erde), Olten 1953, 100 頁以下他

5, Wilhelm Heinsius,「J. Fr. オーベリンとシュタインタール」(J. Fr. Oberlin und das Steintal), 1955- P. Krauli,「グスタフ・ベルナー，業績と人」(Gustav Werner, Werk und Persönlichkeit), Stuttgart 1959.6.

6,「J.F. オーベリンの生涯と Dr. ヒルペルト , B. シュトゥーバーたちが編纂した手紙の全集」J.F. オーベリンの完全な生涯の物語と Dr. Hilpert, B. Stüber による書簡全集の出版と W. Burdchardt による編集翻訳 (J.F.Oberlins vollständige Lebensgeschichte und gesammelte Schriften herausgegeben von Dr. Hilpert, B. Stüber u.a., zu- sammengesteilt und übertragen von W. Burdchardt), 4 Teile, 1843. —E. Beyreuther,「現実主義と信仰の経験」-1976 年 1 月 1 日、ヨハン・フリードリヒ・オーベリンの没後 150 年記念に。(Realismus und　Erfahrung des Glaubens. Zum hundertfünfzigsten Todestag von Johann Friedrich Oberlin am 1. Juni 1976), in: derselbe , Frömmigkeit und Theologie, Hildesheim

1980,265-280頁

7, Martin Gerhardt,「ヨハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルン、生活像」(Johann Hinrich Wichern, Ein Lebensbild), II. Band, Hamburg 1928, 245 頁.

8, Friedrich Hauß によって引用された「キリスト教徒の父」, Väter der Christenheit, II. Rand, 1957, 130 頁

9, 103 頁以下注 4, 5 参照

10, 同上

11, 113 頁注 8 参照

12, Schnabel 404 頁以下、バロン・フォン・コトヴィツ、ヨハン・エバンゲリスタ・ゴスナー等々も疑いもなく同じものに属している。(Zweifellos gehören in diesen Zusammenhang auch Gestalten wie Baron von Kottwitz, Johann Evangelista Goßner u. a.) Dazu: Hs. Brandenburg,「大都市の中で神の呼ばわる人」(Rufer Gottes in der Großstadt),1951,よい概論として(als gute Einführung) Zu Großner vgl. Martin Gerhardt,「内国伝道の 1 世紀」(Ein Jahr- hundert Innere Mission), I, II, 1948, in Band I, 120 頁以下 - Hermann Schauer,「1 世紀の変遷の中での女性ディアコニー」(Frauen entdecken ihren Auftrag. Weibliche Diakonie im Wandel eines Jahrhunderts), Göttingen 1960, 107 頁以下 -H. Dalton, J. Goßner, (1873),1892 2 - H. Lokies, J. Goßner, (1936), 1956. 2-W.Hoisten, J. Ev. Goßner, 1949 (mit Literaturangaben).

13, Johannes Kober,「Chr. フリードリヒ・シュピットラーの生涯」(Chr. Friedrich Spittlers Leben), Basel, 1887- Karl Ruth,「南ドイツの救護施設運動、Chr. H. ツェラーとシュヴァーベンの敬虔主義(Die Päda- gogik der süddeutschen Rettungshausbewe- wegung, Chr. H. Zeller und der schwäbische Pietismus),1927- H. Erbacher:「バーデンにおける内国伝道」(Die Innere Mission in Baden),, 1960

14, Schnabel, 410 頁と上記註 13.

15, Schnabel 407 頁以下 - Chr. H. Zeller,「キリスト教貧民学校教師のための経験の教え」(Lehren der Erfahrung für christliche Armenschullehrer),1827 - H. Thiersch,「Chr. H. ツェラーの生涯」(Chr. H. Zellers Leben), 2 Bände 1876 以下

16, Martin Hennig,「内国伝道の歴史に関する資料」(Quellenbuch zur Geschichte der Inneren Mission), Hamburg 1912,138 頁以下

17, Schnabel . 404 頁以下 - Martin Gerhardt, Wichern, I. Band, 255 頁 - J. H. Wichern,「J. ファルクとヴァイマールの彼の研究所」(J.Falk und sein Institut in Weimar) (Ges. Schriften VI, 1908, 1-59) -T.Reis, J. Falk の「非行少年の教育者としてのファルク」(J.Falk als Erzieher verwahrloster Jugend), 1931 mit Literaturangaben.

18, Gerhardt, Wichern, I. Bd.,253 頁以下 siehe Register.「まだ完成していないグラーフの伝記」(Eine Biographie über den Grafen steht noch aus.)

19, Gerhard Noske,「今日の福音主義教会のディアコニー」(Heutige Diakonie der ev. Kirche) 1956, 19 頁

訳者あとがき

本稿は下記の「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」(E. バイロイター著) 全10章の中の第3章にあたる。

GESCHICHTE DER DIAKONIE UND INNEREN MISSION IN DER NEUZEIT、ERICH BEYREUTHER

18-19 世紀のディアコニー (キリスト教社会福祉) 活動から内国伝道が生まれた。その母胎となった信仰覚醒運動を生み出した敬虔主義との関連がときおこされている。聖書協会は各地に聖書を頒布する運動から、あらたな宣教の必要を見出した。幼稚園をつくり、またキリスト教産業に更正した非行少年を教育して就職させるといった運動でもあった。

ドイツには福祉事業団の全国組織 6 つがある。そのなかのキリスト教プロテスタントの「ディアコニー事業団」を中心にした歴史が記されている。本書の第 1 章は「長崎ウエスレヤン短期大学　地域総合研究所報第 11 号」に第 2 章を「長崎ウエスレヤン大学紀要第 1 号」に掲載させていただいた。増補 3 版全 10 章のうち、第二次世界大戦前までの 5 章を翻訳する計画である。